



## 海外での労働運動の体験から

さとう かつひこ  
佐藤 克彦

自治労本部国際部長・前P S Iアジア太平洋地域事務所・所長

2003年3月にオーストラリアのシドニーに行き、その後、同年11月からマレーシアのクアラルンプール、2006年11月からシンガポールでのP S I（国際公務労連）の勤務を終え、今年3月から日本に戻って自治労本部国際部長の仕事に従事することになった。ちょうど7年ぶりの日本での仕事ということになる。ありきたりの感想だが、7年というのはとても長かった気もするが、過ぎてしまえばアッという間のことだったという感じもしないではない。そこで紙面をお借りしてこの7年間を簡単に振り返ってみたいと思う。

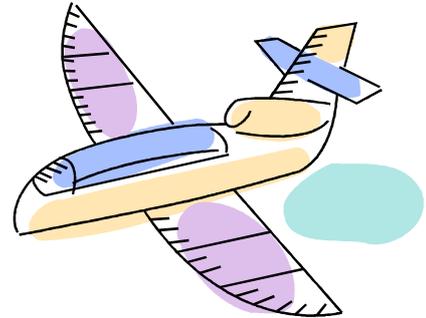
2003年にシドニーに行ったのは、当時クアラルンプールにあったP S Iアジア太平洋地域事務所（P S I - A P R O）での新たな任務に就く前に英語の研修を行うためだった。当時私は自治労会館内にあるP S I東アジア小地域事務所（P S I東京事務所）の仕事をしていて、オーストラリアのP S I加盟組合A S Uが、私の英語研修のために事務所の一室を提供してくれたので、そこでP S I東京事務所の仕事をしながら英語の勉強も行うという生活をしていたのである。シドニーではオーストラリアの労働運動についていろいろ学ぶことができたが、私の印象に残っているのは、今なおコモンウェルスの結びつきが強いということと、労働組合運動が労働党の活動とともに

地域にしっかり根付いているということである。

クアラルンプールに移って正式にP S I - A P R O事務所長としての仕事を始めたのは2004年1月からである。P S Iの事務所はE I（教育インターナショナル）の事務所と同じフロアをシェアしていたので、E Iの仲間とは日常的な付き合いをすることができたし、彼らから多くのことを教えてもらうことができた。東京やシドニーに較べて社会的インフラが不十分なクアラルンプールでは、事務所の運営でもさまざまな困難に直面したが、現地スタッフの協力を得ながら何とかやりくりすることができた。

クアラルンプール滞在中に体験した最も大きな出来事は、何と言っても2004年12月26日に発生したインド洋沖地震と津波がもたらした悲劇であった。その日私はちょうど正月を日本で過ごすために日本に向かう飛行機に乗っていたが、乗客の一人からその一報を聞いた。そして日本に着くと全てのマスコミが被害のすさまじさを伝えているのを見聞きし、思わず背筋に悪寒が走った。

正月休みも早々にクアラルンプールに戻るとP S I本部の書記長から電話が入り、被害の状況、P S Iとして何が出来るか、何をなすべきか至急知らせるようにと指示された。そこで私は被害が最も大きかったインドネシアのバンダ・アチエの



PSIのメンバーと連絡を取り、直ちに現地に向かうことにした。バンダ・アチェに近づく飛行機の窓から見たのは信じられないような光景で、あたかも戦場に向かうかのような気分になったのを今でも覚えている。空港に降りるとすぐに地獄のような状況で、まさに茫然自失で言葉も出なかった。バンダ・アチェの後にインドのチェンナイとスリランカのコロンボとゴールにも行ったが、津波の恐ろしさと被災者の悲しみにくれる情景は、一生私の脳裏から離れることはないだろう。

2006年になってシンガポールのPSI加盟組合AUPEの書記長が、AUPEビルの一部をPSIに無償で提供するからPSI-APRO事務所をシンガポールに移してはどうかという提案をしてきた。そこでAUPEにお邪魔して事務所を拝見し非常によい提案だと確信したので、PSI本部の書記長に報告し事務所移転の希望を伝えた。話はスムーズに進み同じ年の暮れに引越しを行い、今年2月末に日本に帰るまでシンガポールで仕事を続けてきた。

7年間のPSIでの勤務中に私が特に力を注いだ活動は、自立的な労働組合づくり、公務員労働者の労働基本権、PSI以外の労働組合や組織との共同行動、アジア開発銀行（ADB）対策、国際連帯税（ISL）キャンペーンなどである。

これらの内容を詳しく説明することはできないが、幸いにも多くのPSIのメンバーやその他の人たちの協力と支援を得ることができ、いくつかの具体的な成果を上げることができた。その意味では私は大変ラッキーな人間であったと思う。

最後に自分の体験を踏まえて、日本の国際労働運動への期待ということで一つだけ述べておきたい。それは国際労働運動と国内の労働運動との結びつきをもっと強めること、そしてこうした活動を担う人材を養成することである。残念ながら日本の労働運動というのは海外であまりよく理解されているとは言えないというのが実態であろう。

「欧米先進国では」という常套句と決別し、受動的でなく自主性と主体性を持って、より積極的・能動的に国際労働運動に参画していくことが必要である。そうすることによって日本の労働運動の国際化がより進むと同時に、労働組合そのものの力も強化されていくと確信している。

昨年12月の世界大会でフィリピン人のアンベツト・ユーソンがBWI（国際建設・林業労組連盟）の書記長にアジアから初めて選出されたが、これはとかく欧州中心主義と擲擲される国際労働運動に一石を投じることになるだろう。